

- 1 冬晴や青の届かぬ天の端
- 2 その影のひとつ雀になる木の葉
- 3 冬景色どれも故郷に似てゐたる
- 4 水鳥の声一鳥を取り囲む
- 5 親指のずぶりずぶりと蜜柑むく
- 6 散つてゆく色づいてゆく冬紅葉
- 7 白昼やみるみるまはるおでん酒
- 8 最期まで適温の熱爛が来ず
- 9 冬波に帆船の如き羽毛かな
- 10 冬ざくら見上げおほかた空の色
- 11 体より寒さ抜け行くとき眠し
- 12 木洩れ日を逸れる綿虫青くなる
- 13 ほんたうの色に還つてゆく落葉
- 14 猟犬に野生の匂ひありにけり
- 15 うどんとは思へぬ太さ狩の宿
- 16 冬薔薇棘の先まで深紅なる
- 17 もう湯冷めしてゐる足の指の先
- 18 霜柱さくさく踏みて泥だらけ
- 19 極月や海の底より波の音
- 20 脱衣所の人通るたび柚子湯の香
- 21 風花の止みてどこにも無かりけり
- 22 雪になる雨の水輪の小さくなる
- 23 一斉に振り向きさうな黄水仙
- 24 風音に残る寒さのありにけり
- 25 母よりも人に慣れたる子猫かな

- 26 翻る火のうら暗き野焼かな
- 27 重なりし影の明るき春の雲
- 28 山仰ぎつつ耕人の休みたる
- 29 車避け結局春の泥を踏む
- 30 沖の明るさを目指せる春の波
- 31 雛飾るとき母のこと祖母のこと
- 32 揚雲雀どこかと傘を傾ける
- 33 大胆に人へ近づく春の鳥
- 34 春の風邪街燈なべて潤みたる
- 35 灯を消して水音のある春の夜半
- 36 山よりも麓の村に春の雪
- 37 春雪のところどころに屋根の色
- 38 春の風邪列車の浅き揺れに酔ひ
- 39 諸葛菜木洩れ日はいま午後の濃さ
- 40 正直に寝坊と述べぬ新社員
- 41 日かげりて華やぎかげらざりし花
- 42 山桜まで続きたるけもの道
- 43 花屑に埋め尽くされし筵かな
- 44 枝のすぐそばの空より散る桜
- 45 包み込む息の影ある石鹼玉
- 46 藤の香の房をしたたり落ちにけり
- 47 夏来る世界が青くなつて来て
- 48 若葉より幹の匂へる雨の森
- 49 木々よりも近き薄暑の空の青
- 50 紫陽花と水とひとつの閑けさに

- 51 街中の鉄勾ひ立つ梅雨晴間――
- 52 次々に猫の現る五月闇――
- 53 夏めくやうすみづいろの入院着――
- 54 トンネルに涼しく声の跳ね返る――
- 55 涼風の高さに赤子寝てをりぬ――
- 56 子を寝かしつけてやうやく夕涼み――
- 57 半透明な真夜中のなめくぢり――
- 58 残りたる器の水や夏料理――
- 59 家々の無ければもつと風薫る――
- 60 がつしりとビールジョッキの柄を握る――
- 61 喧騒の心地良くなるビアホール――
- 62 暑気払ひなどと言ひつつ飲みすぎる――
- 63 カーテンの出たがつてゐる網戸かな――
- 64 芝生からむつくり起き上がる裸――
- 65 尺蠖のあたまはこつちだと思ふ――
- 66 額の上空を見てゐるサングラス――
- 67 人一倍愛想の良きサングラス――
- 68 車内まで届く明るさ夏の海――
- 69 外は雨木陰の中はあめんぼう――
- 70 水馬の岸へとどかぬ水輪かな――
- 71 黒々と降り注ぐ夜の蝉の声――
- 72 夜濯の背中に話かけられず――
- 73 ころころと避暑地の天気変はりたる――
- 74 注いでゐる麦茶どんどん濃くなりぬ――
- 75 日輪と海一色の大夕焼――

- 76 腕の汗時計の形してをりぬ――
- 77 灯取虫止まりて壁の色となる――
- 78 火蛾を掃くことに始まる山の朝――
- 79 祭なる町をひとつにする音頭――
- 80 人の目のぎらぎら光る夜店の灯――
- 81 手花火の明るさ家族ひとつ分――
- 82 新秋の葉書にありし異国の香――
- 83 くるぶしに風の絡まる秋初め――
- 84 新涼や洗面台の水の影――
- 85 独りなる部屋のがらんと秋めける――
- 86 別人のやうな顔ある秋の水――
- 87 蟻螂の猫の如くに顔洗ふ――
- 88 向いてゐる方へは飛べぬばつたかな――
- 89 増えて来し翅音に花野目覚めける――
- 90 秋晴の中なる蝶を消せる青――
- 91 地球いま水の静けさ星月夜――
- 92 空つぼのバスの明るき十三夜――
- 93 隙間ある戸からするりと月の猫――
- 94 首上げし鹿に緊張したる闇――
- 95 朝晩にバスが一本紅葉山――
- 96 鯉の背に止まるつもりの蜻蛉かな――
- 97 木犀の香りに慣れてしまふ午後――
- 98 馬追の鳴いてゐる長靴の中――
- 99 虫の闇つたなき声を拾ひたる――
- 100 虫鳴いて虫鳴いて夜のとこしなへ――